OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	京都市芸術大学新学舎について
Author(s)	稲田, 尚之
Citation	デザイン理論. 1980, 19, p. 80-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53696
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

京都市立芸術大学新学舎について

稲　田　尚　之

移転整備の経過

S43．1　統合移転整備を前提に芸大設置認可申請について市会の承認を得る。

S44．4　芸大発足

（以後，建設予定地の状定に至るまで，さまざまな経緯があったが，ここでは省略し現　現地沓掛に快定の時点より直接建設計画にかかわる事項のみを抜すいし，記することとする。

S51．1　市長記者会見で沓掛が有力と表明。両学部教授会で調査結果を検討，全員一致で沓掛を選定。

市会委員会で報告（沓掛に内定，53年完成目標）

S51．4　移転整備推進協議会開かる。

5　10人委員会，プロジェクトチーム，移転整備連絡会発足

7　10人委員会

①　市側より作業日程説明。

②　プロジェクトチームより「基本構想案」説明

③学学生部長より「移転整備についての学生要望」説明。

7　基本計画作成に着手。

8　10人委員会＋プロジェクト

ＫＫ大場より「基礎調査及配置基本構想案」説明。

8　10人委員会＋プロジェクト

基本構想案について検討「配置基本構想案に対する意見」をまとめる。

8　プロジェクト＋両学部長

美術学部長より基本構想案に対する学校の意見を説明。

9　10人委員会

局長より「規模の計画表（1.59倍案）」提示説明。

9　主幹より「各棟の建設条件設定上の必要事項」について説明。

9　学内にて整備委員会を中心に各学部，各科の空間，設備の要望書を作成，

9　10人委員会

局提示案に対する両学部教授会の情況と作成報告を受く。

9　10人委員会＋正副整備委員

学内意見の調整まとめ

局への要望事項

9　移転整備推進協議会＋正副整備委員

1.59倍案に対する要望事項説明

9　配置計画最終確定

11　移転整備推進協議会＋正副整備委員

局第２次回答1.64倍案を示す。

12　10人委員会　局第２次回答を基本的に了解

12　建築基本設計，土木実施設計に着手

S52. 1　意見書「芸術大学統合移転整備計画規模案について」回答を文芸局長に提出。

1　建築規模最終案確定。

1　芸大整備委員会

「マスタープラン」と経過の説明。

1　市会委員会に局原案の3ヶ年計画を説明。

2　「芸大移転整備4ヶ年計画」

市長快定，長表，総額69億円。

2　10人委員会

基本設計にかかわる希望意見の提出を承認。

2　第一回プロジェクトチームと局，営繕係，設計事務所との打合せ会。

3　プロジェクトチーム，局，営繕課設計事務所会合

局より「基本設計第一回平面図」提示，建設面積28,004㎡

3　10人委員会

3.17提示の第一回平面図」に対する要望事項を教授会から提出。

4　10人委員会＋プロジェクトチーム

「基本設計第二回平面図提示。

5　プロジェクトチーム，局，営繕課設計事務所打合せ会。

「第2回平面図」に対する要望事項提出。

5　10人委員会

5.6 プロジェクトチーム，局，営繕課設計事務所打合せ会

6　土木造成計画説明会

7　基本設計合意

10　10人委員会

実施設計事務所快定報告。

11　プロジェクトチーム，局，営繕課設計事務所打合せ会。

12　プロジェクト・入試委員会打合せ会。

12　プロジェクトチーム，局，営繕課設計事務所打合せ会。

基本設計，及植栽について。

S53. 2　プロジェクトチーム，局打合せ会，実施設計2.20頃完了。

4.19　起工式

5　業者快定報告会。

サイン計画について

5　10人委員会

5　プロジェクトチーム，局，打合せ会

建設日程について。

6　プロジェクトチーム，局，打合せ会

7　プロジェクトチーム会合

学生要望，ギャラリーについて。

9　プロジェクトチーム，局打合せ会

造園計画について。

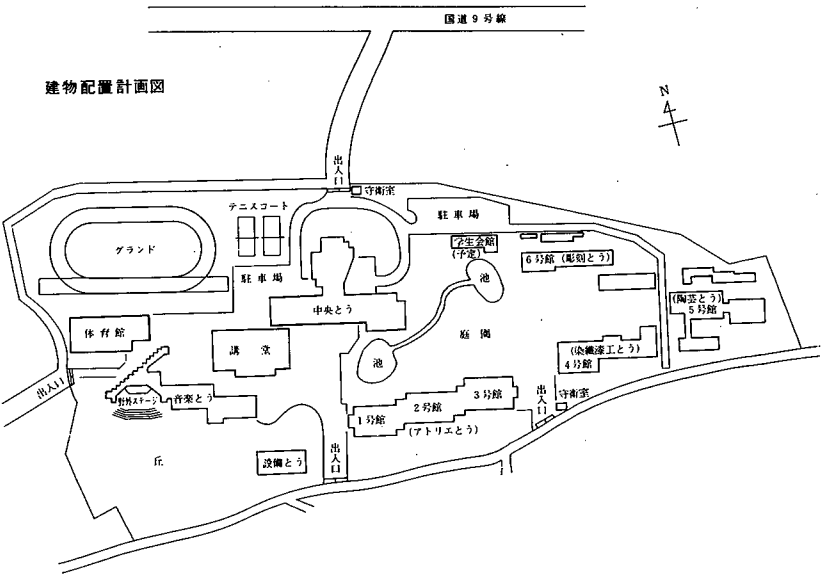
S54．2　プロジェクトチーム会合

色彩，内装，サイン計画について。

S54．7　名称についての会合。

S55.4.7　竣工式。

10　56春完成を目標に講堂基礎工事中。



京都市立芸術大学施設の概要

○所 在 地　京都市西京区大枝沓掛町13の６

○規　　模　敷地　66.926㎡　　建物　27.800㎡

○建設年度　昭和52年度から55年度まで（４ヶ年）

○建設経費　総工費82億1,900万円

◎施　　設

(1) 中央とう（本部とう）

地下１階，地上４階建 7,936㎡

収蔵庫，書庫，陳列室，展示室，図書閲覧室，食堂，事務局事務室，会議室，講義室，研究室，実験室など。

(2) １号館，２号館，３号館（アトリエとう），４階建，7,19㎡

教室，研究室，制作室，加工室，実験室。

(3) ４号館（染織漆工とう）

２階建，2,066㎡

制作室，研究室，実習室，工房。

(4) ５号館（陶磁器とう）

平家建，1,225㎡

研究室，実習室，窯場。

(5) 6号館（彫刻とう）

2階建，1,481㎡

制作室，研究室，実習室，

(6)号音楽とう

3階建，3,060㎡

練習室，研究室，大合奏室，

(7) 講　　堂

2階建，1,675㎡

650人収容

(8) 体 育 館

2階建　1,385㎡

(9) その他附属建物

約1,253㎡

(10) 屋外ステージ

約500人収容

(11) グラウンド

1周約200m

(12) テニスコート

2面

京都市芸術大学移転整備基本構想案

積年の念願であった本学の建設計画がようやくその端緒について現在，移転整備計画案をより具体的なものとして未来への大学の展望を全学的な合意のもとに構想としてまとめる必要がある。

1．文化の中核としての大学

本学の建設が決定した沓掛の地は市の文化的中心からの距離も離れ，伝統的文化環境と云う点からは，いささかの懸念もあるが，その反面，市の東方にかたよる現在の文化センター地域に対する，西の文化的中核として，地域社会に

貢献出来る大きな可能性をはらんでいる。

また，本学独自の良き伝統を継承しつつ，より新たなる研究教育の内容と環境の整備により，その自立性を守りつつ且つ開かれた大学として社会的責任をはたすことにより，広く日本の文化の向上に貢献出来得るものと信じられる。

また，洛西地域文化センターの中核として，本学の未来を考えた場合，世界誇れる内容と施設が望まれる事は当然であろう。充実した研究教育施設，演奏ホール，図書館，展示ホール，学生施設，管理施設等，広い視野に立った将来の展望のもとに計画がなされなければならない。

また，近隣地域への文化施設の誘致や，それらとの協力による文化性の向上も考慮されねばならない。

○地域社会との交流の問題

○社会人教育の問題

○国際交流の問題

○研究施設の開放の問題

○卒業生の施設利用の問題

等々の為に可能性を持つ空間として計画されることが望まれる。

2．両学部の自立と交流

今回はじめて両学部が，同一地域に建設されることになり，研究，教育の面からも両学部の交流により本学に新たな刺激を与えると云うことは，大きな意味を持つものと云える。

勿論，研究教育の相違による両学部の自立性の確保は，当然のこととは云え学生ホール，講義棟，図書館，演奏ホール，展示ホール，体育施設，広場，等における両学部の教職員，学生の相互交流は，研究教育にとっても多大の効果をあげ得るものと信じられる。

したがって，配置計画にあたっては，両学部，各科，各専攻の研究教育施設

管理施設等の持つ特性を尊重しつつ，両学部の交流を促進し得る積極的な空間の創造が望まれる。

3．未来の研究教育に対応し得る大学

大学の計画にあたっては，今回の建設計画の内容規模のみではなく，未来におこり得る新たな研究教育活動の為の空間を建設し得る余地を考慮した計画が望まれる。

たとえば，両学部の境界領域に未来に予測される学部，あるいは必要とされる科，専攻，また独立研究機関等に対する建設の可能性を考慮して，全配置計画を立案しておく必要がある。

4．研究施設

現在，教員研究室の数及び面積は，その絶体量が不足し，学内における研究は，ほとんど不可能な状態である。専任教員各人に一室と，その準備室，及各科，各専攻の共同研究室及会議室の設置は，大学の研究態勢の充実にとって基本的な問題である。また，各学部，各科，各専攻の特性に応じた研究施設と設備の充実は基本構想の段階で計画されている必要がある。

5．教育施設

本学美術学部の改革案の基本理念にもとづく新しい教育のあり方は，芸術系他大学からも注目の的となっているが，そうした本学独自の教育の場としての教育施設は，その基本理念にもとづく教育を可能にし得る空間であらねばならない。学生の移動をともなう増減をかぎられた面積で可能にすることは，むずかしいが，定員に対して余裕のある面積の確保と空間の互換性を持たせることにより基本理念に近づき得る教育空間として計画されねばならない。ただ，設備をともなう制作室，共通教室については，その空間の自在性を持たせること

は困難であろうが，隣接空間に拡張の予地を残しておくことがぜひ必要である。

音楽学部については，各科，各専攻の教室及び大学院の空間の増設を可能にし得る計画が必要である。尚，両学部に共通して，一般教室，及び実技教室の数，面積，種類及設備の飛躍的拡充が望まれる。また，本学の特殊性にもとづく各学部，各専攻の空間及び設備計画は細心の注意が必要とされる。たとえば音楽学部，レッスン室の防音，吸音と，それにともない必要とされる冷房，喚気等，また，美術学部，陶磁器専攻の“ろくろ”“かま”の設備，染色専攻の乾場，水洗場，化学染料の後処理（公害問題），一階と屋外を必要とする彫刻専攻，日本画，油彩専攻の彩光問題と，二，三階に設置された場合の作品の搬出入リスト，漆工専攻の最適温度と光，ほこり，及冷房問題，デザイン専攻の構想室と制作室の分離，写真，印刷，工作室に対する配慮，また，共通問題として工房の発生音と化学薬品の後処理等々が必要とされる。また，近隣に関連の民間工房のない洛西地域では特に各科，各専攻の工房設備の充実が望まれる。また，一般教室にとっても設備の近代化が強く望まれる。特に視聴覚教育設備の充実は，建築設備の段階で企画されている必要があるので特に注意すべきであろう。

6．図書館

図書資料の充実，空間設備の合理化，各種研究スペースの確伴は勿論であるが，視聴覚化を含めて近代化，機械化がぜひ必要であろう。特に本学には貴重な美術工芸，音楽資料が多く所蔵されているので，その機能的管理運営と収蔵だけではなく公開の常設展示ホールもぜひ必要とされる。

7．演奏ホール

演奏ホールは，特に本学の中心となるべき施設である。京都市の所持しないオペラ公演も可能な充実した舞台空間と設備をともなうものとして定期演奏会や大学の行事，あるいは社会，近隣との交流の場

や大学の行事，あるいは社会，近隣との交流の場として利用出来よう企画されることが望ましい。

続による展示，小集会を可能にするような広さと設備を必要とする。

8．学生施設

学生ホールは，本学の中心施設の一つとして，多目的ホール，食堂（最低200名），喫茶施設，談話室，購買施設，クラブボックス，自治会ボックス，宿泊及入浴，洗濯施設，会議室等が必要である。多目的ホールは両学部，各科あるいは外部とのふれあいの場として，さまざまな目的，行事に利用されるであろう。集会，小演奏会，自主展示等これらが有機的に機能出来る空間と設備が望まれる。尚，学生寮については学生の強い要望もある。

9．体育設備

体育設備としては，体育館，サッカー，ラクビーの可能な運動場，プール，その附属施設から構成される。市の中心からも離れ，体育設備を近隣に望めない現状では，こうした設備の設置が強く望まれる。

10．管理施設

両学部の統合，現在より広い敷地に展開する大学，更に開かれた大学と云う点を考慮すると，管理施設には，充分な配慮を必要とする。特に通信，放送，防災施設，清掃に関する設備の完備が必要であろう。

11．そ の 他

○駐車場は最低100台～150台を必要とするだろう。

○組合室は，いづれかの空間に組込む必要がある。

○国際交流や国内の交流を考えるとゲストハウスの建設が望まれる。

○大学の年間行事に対応出来る空間計画が望まれる。

空間構想について

○地形との対応

地形との対応を考えると出来るだけ現地形を尊重した施設の配置を考えることが望ましい。現地は北東への傾斜地であるが，あえて南傾斜とする必要はなく，フラットに造成するよりも，その傾斜を逆に利用することは視覚的変化と云う意味で，キャンパスにゆたかな空間変化をもたらすであろう。敷地と施設の容積の比較を考慮した場合，未来への発展まで予側すると決して広い敷地であるとは云えまい。

したがって，施設の建設される部分だけでも相当な造成を行わなければならないことは予側出来るが，基本的には現地形の尊重と云うことを中心に計画する必要があると考えられる。

○植栽について

芸術大学の環境にとって特に自然環境が，その構成員におよぼす心理的，肉体的影響が大きいと云うことは当然であろう。施設は出来るだけ低層でおさえることが望ましいとしても，敷地と施設の容積の比率を考える時，ある程度の施設の積層化はやむを得まい。それよりも，いかに空地をまとめて残すか，自然と施設のかかわりあいを，きめこまかな空間構成として，そのふれあいをより多くつくり得るかが重要であろう。現状の自然植生と新しい人工的植栽及施設との比率と調和は計画の基本的問題点と云える。尚，現実の教育的見地から美術学部の描写教育にとって，さまざまな植物が望まれている。尚，同様の理由から魚や小動物や鳥の飼育に対する希望もある。ただ，以上の件については，充分な管理態勢の確立なしには望めないことではあるが，管理予算なしの後向きの姿勢ではなく，豊かな環境には予算がかかることを確認する必要があろう。

○施設の構成手法について

前記の教育研究施設のあり方にみられるように，本学の教育研究の内容は，他大学にない，伝統と進歩の両面をふまえた独自の性格を持つものと云えよう。現実を考え，かつ近い将来，あるいは未来への変化や発展に対応出来る環境を創造するためには，独特の計画手法の開発がなされなければならない。各学部，各科，各専攻の独自性を考えた場合，その研究教育施設には，各々に独自の機能が要求される。西欧的空間形態と云える自己完結的個空間（例，音楽学部，レッスン室）の必要性と，本学美術学部の改革案にもとづく学生定員の流動性や将来の増築，未来への発展を考慮した日本的空間手法とも云える空間の導入が内外空間に必要とされるだろう。（例，日本家屋の疵下の空間，あるいは縁側は，内部空間でもあり，外部空間でもある。）広場，コート（中庭），疵下，廊下ホール，ホワイ土，吹抜け，スキップスフロアー等々，一見あいまいにみえる空間の導入は，施設内部のことなる機能空間同志，あるいは，内外空間の融合に役立つであろうし，こうした手法は，各空間の目的機能を充足しつつ，整然としすぎないことを望む本学の学風との調和をもたらすであろう。

○増築と予算

建設は，数次にわたって行われるとすれば，建築には増築可能な手法を考慮しなければならないのは当然であろうが，主要設備も，それを予測したものでなければならない。主設備棟よりの敷地内メインダクトも増築を考慮した充分なものでなければならないが，設備棟自身の拡張の可能性も考慮しておく必要がある。尚，施設への重点的予算配分は，基本構想の時点で，すでに計画しておかねばならない。全環境（土木，植栽を含む）及建築，設備の予算は，綜合的，かつ細部にわたり詳細に検討の上，決定する必要があろう。

（昭和51年７月15日）

京都市立芸術大学　新学舎について

稲田尚之

本年3月後半，大学の新学舎への移転統合以来ほぼ半年が経過した現在，これ迄の学舎の新築移転の経過と現状をここに記録しておくことは大学の未来にとっても必要なことであろう。施設の概要，及建設前及建設中の経過は後記の一覧表を参照して載くこととして，ここでは主として計画の基本問題及その基本理念とキャンパスの全体像との関係を中心に記述して行くこととしたい。

まず，この大学の建設の出発点が，大学の新設ではなく，概設の美術，音楽両学部の統合整備ということから出発したことをまず確認しておかねばならない。

建設予定地の選定にあたっては，移転整備を前提に芸大設置認可申請についての市会の承認を得てより現地沓掛に決定するまで数年，さまざまな経緯があったが，本来，芸術大学としては，文化都市京都の中心に存在するべきであろうと云うのが私の主張であった。然し紆余曲折の結果，この地に決定され早急に大学建設の理念及構想を大学側として市側に提示する必要があり昭和51年7月15日付，基本構想案を起草，両学部教授会，10人委員会の承認を得て，市へ大学側の意向として提出された。

この構想案は，現在そのすべてが実現されていないとしても，敷地のマスタープラン，及建築の基本計画の基礎的な骨子となっている。本来，つくられるべき環境は，その理念の表現であらねばならない。百年の歴史と伝統を持つこの大学が，その輝かしい伝統を受け継ぎ，さらに未来への発展の拠点となるべきキャンパスをどうつくるかが構想案の基本的なテーマであった。

キャンパスは中央に大学の監理機構を含む中心的な施設（中央とう）及講堂を設け，東側に美術学部，西側に音楽学部，西北に体育館，グランド等の体育施設が設けられている。

中央ゾーンは北側の国道9号線より正門と南側の市民ゲートを結んで中央の

南北軸とし，その軸上に中央棟と講堂，地を配しその中心に広場がある。ここは美術，音楽両学部の教職員，学生又市民との交流の場でもある。中央棟の一階の食堂，ギャラリー，展示室又講堂の配置はこの大学の人的交流を促進するための大きな役割をはたすべく計画された。中央棟はこの他一階，地階に図書館機能，二階に管理事務，会議機能の空間，３階は学科教室，４階には学科研究室が設けれられいる。美術学部の１，２，３号館には日本画，油画，構想設計，版画，デザイン関係の諸室が置かれ，トップライト等を必要とする絵画関係が主として上階に設けられている。

染色，漆工の４号館，陶芸の５号館，彫刻の６号館は，それぞれ作業上，接地性を必要とするところから低層で独立建築としてつくられた。音楽学部は主として個室としての研究室，レッスン室を中心に計画され特に防音構造には重点がおかれている。

尚，音楽学部の南側には芸大の丘と呼ばれる丘がありこの斜面を利用した野外ステージも設けられている。

両学部の統合によりもたらされる新たなメリット，人間の交流と，そこから生みだされる新しい芸術創造の場としてのこのキャンパスの機構がどう生かされて行くかは，この大学の構成員の未来にかせられた大きな責任でもあろう。